

小浜島のスク (グスク)

當 眞 嗣 一*

Gusuku Sites in Kohamajima Island

Shiichi TOUMA*

はじめに

沖縄県立博物館では小浜島の自然・考古・歴史・民俗・美術工芸を対象とした総合調査を平成12年度から継続的に実施してきた。平成15年2月27日から2泊3日の日程でこれに参加する機会を得た筆者は、考古学分野を分担することになったが、短い調査日程の中でより効率的に調査を行うためとくにスクと呼ばれている遺跡やそれに類する遺跡に限って調査することにした。

調査初日の午前中は、地元竹富町教育委員会の黒島精耕教育長や歴史民俗資料館の慶田盛正光館長に同行してもらいイハマムル遺跡を、また、午後からは、同町教育委員会文化財担当の仲盛敦氏とともにフルロウ山遺跡の踏査を行った。二日目は、当館で考古学を担当する仲座久宜学芸員とともにユンドゥレースク遺跡の調査を行うことができた。

小浜島については昨年も私用で二日間滞在し、その間ウティスク山遺跡の調査を行いその成果を縄張図にしていたので今回新たに調査したユンドゥレースク遺跡の縄張図を加え報告しその責を果たすことにする。なお、調査の結果、イハマムル遺跡やアールムティワンについても貴重な遺構を残すスクだということがわかったが時間的な制約から縄張図を完成させるまでにはいたらなかった。再調査後あらためて報告したいと考えている。

調査にあたっては、地元の慶田盛正光氏や宮里俊

治氏のお世話になり、また竹富町教育委員会教育長の黒島精耕氏と文化財担当の仲盛敦氏には現地での確認調査と資料収集等について便宜を図っていただいた。紙面を借りて感謝申し上げます。

小浜島のスク

小浜島では現在8カ所の遺跡が報告されている。そのうち6カ所がグスク時代から近世期にかけての遺跡であり、いわゆる早稲田編年で第Ⅲ期から第Ⅳ期に編年されているものである。残る2遺跡が所謂無土器の遺跡で第Ⅰ期に属するものとなっている。今回筆者が調査した遺跡は、第Ⅳ期のなかで独立した石灰岩の上に築かれ、且つ琉球石灰岩の石積み遺構を伴いスクと呼ばれている遺跡である。この種の遺跡は、沖縄本島やその周辺離島などではグスクと称されている。スクやグスクはいずれも「防御された平場(曲輪)」を有するという特徴を備えている。小浜島で現在確認されているスクあるいはスク類似の遺跡は図1の分布図で示したように5カ所である。

さて、沖縄本島やその周辺離島では、古い集落を歩くとその後方にたいてい小高くなった森を控えている。ブッシュをかきわけ中に入って行くとちょっとした広場があって傍らに祠があり聖地になっているところが多い。村人たちはその森をグスクだと言っている。だからグスクは地域の人々の間で聖域としてよく知られた存在になっている。

※ 〒903-0823 沖縄県那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

* Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

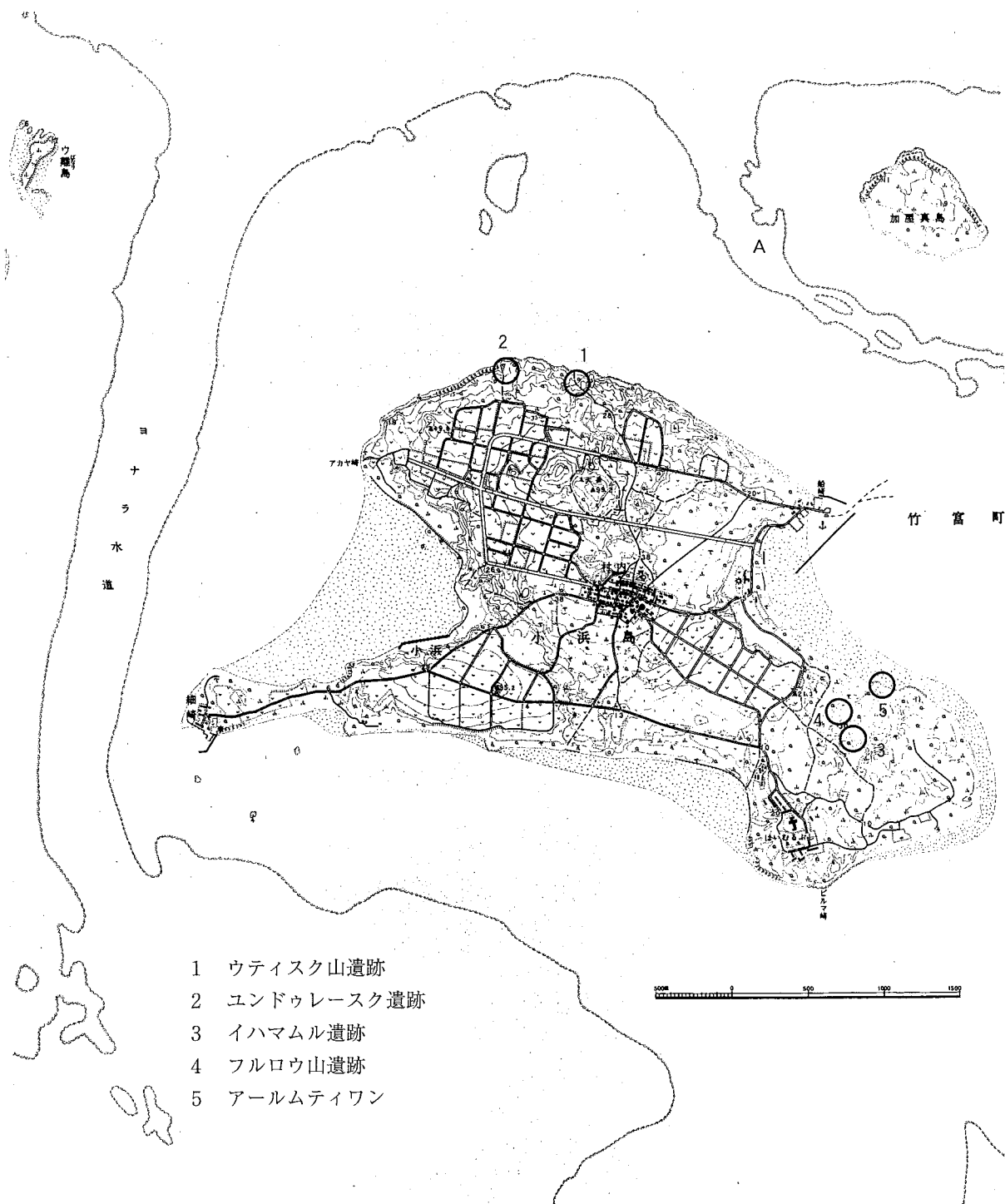


図1 小浜島のスク分布図（バカレースクについては場所が未確認のため図にプロットしていない）

ところが宮古諸島や八重山諸島の先島では少し事情が異なる。つまり先島地方ではグスクとは呼ばないのである。例えば宮古諸島ではグスクのことを「ジョウ」と呼び、八重山諸島では今回報告する小浜島の例のように「ウテイスク」「ユンドゥレースク」等と「スク」と呼ばれるのが一般的である。

では、今回の総合調査の舞台となった小浜島では、防御された平場を有しグスク類似の遺跡を全てスク

と呼んでいるかといえ一概にそうとは言えない。イハマムル遺跡、フルロウ山遺跡、アールムティワン等のように明らかにスクだと認識できても、地元ではスクとは言われてないのである。また、これらの遺跡の中には、アールムティワンのように御嶽として島人から深く信仰されているのが一方、イハマムル遺跡やフルロウ山遺跡のように全く信仰の対象になっていないものもある。

小浜島におけるスクの立地状況とその環境

小浜島は石垣島から南西12km、西表島から東3km、八重山群島のほぼ中央部の海上に浮かび、東西の最大幅5km、南北2.5km、周囲12km、最高所99.4m、面積10.49km²の小さな島である。島の中央部はくびれており、その北寄りに最高所の大岳があり、その南側には現在の集落が展開している。

1646年に編纂された「正保の国絵図」の写しではないかといわれる都城島津家所蔵の古地図には、海上の里程について「タケトミヨリ小浜迄二里」「小浜ヨリ古見迄三里」「小浜ヨリ黒嶋迄二里一八町」と記され、島嶼間の海上交通路が詳細に描かれている。それによると、トゥマール（現在の小浜港）を起点にして、①石垣島御崎泊間、②西表古見間切平西村間、③黒島間の三つのルートが記されている。①では直接御崎泊に向かうのと竹富島を経由する二つのルートが描かれ、②のルートではウティスク山遺跡やユンドゥレスク遺跡の沖合の海上を通過するルートが描かれている。また、③は黒島に達するルートであるが、新城島上地、同下地を経てその先は波照間島に達するルートとして描かれている（図2）。この島嶼間海上交通路網からは小浜島周辺の海域が島々を結ぶ海上交通路のセンター的役割を担っ

ていたということをうかがうことができる。島のほぼ中央に聳える大岳からは晴天のとき与那国島を除く八重山の島々が望見できるため「八重山の臍」に例えられている。小浜島における海上交通路網の中心的位置を示すに相応しい呼び方であると思う。

小浜島の地元での呼称はクモーマ、クバマ、クンマーマという^(註1)。現在は小浜島の北北東約1.6kmに浮かぶ嘉弥真島の二島で字小浜を構成する。集落の中心は島の中央から北寄りに聳える大岳（標高99.4m）を背後にその南側一帯の緩やかな段丘の上に立地する。一説によれば古くは9つのムラが存在していたという。ナカンズニ・クファンテ・トヌレ・ニセナク・ギサキ・ハイナク・シマンドゥ・ヤサキ・クーヤと呼ばれる小集落^(註2)がそれで、それぞれが沿岸部を中心に点在していたようだが集落移動等によって現在の場所に落ち着いたといわれる。

沖縄タイムス社発行の沖縄大百科事典の小浜島の項で、牧野清は島の人口動態について「1651年152人、1737年544人、明和の大津波（1771）当時は900人」と記述している^(註3)。

島のまわりは南島特有のサンゴ礁が広がる地域である。とくに小浜島周辺のサンゴ礁群は石西礁湖とも呼ばれ、海底はやや深く10m内外の水深が顕著となっている。さらに小浜島と嘉弥真島の間にはサン

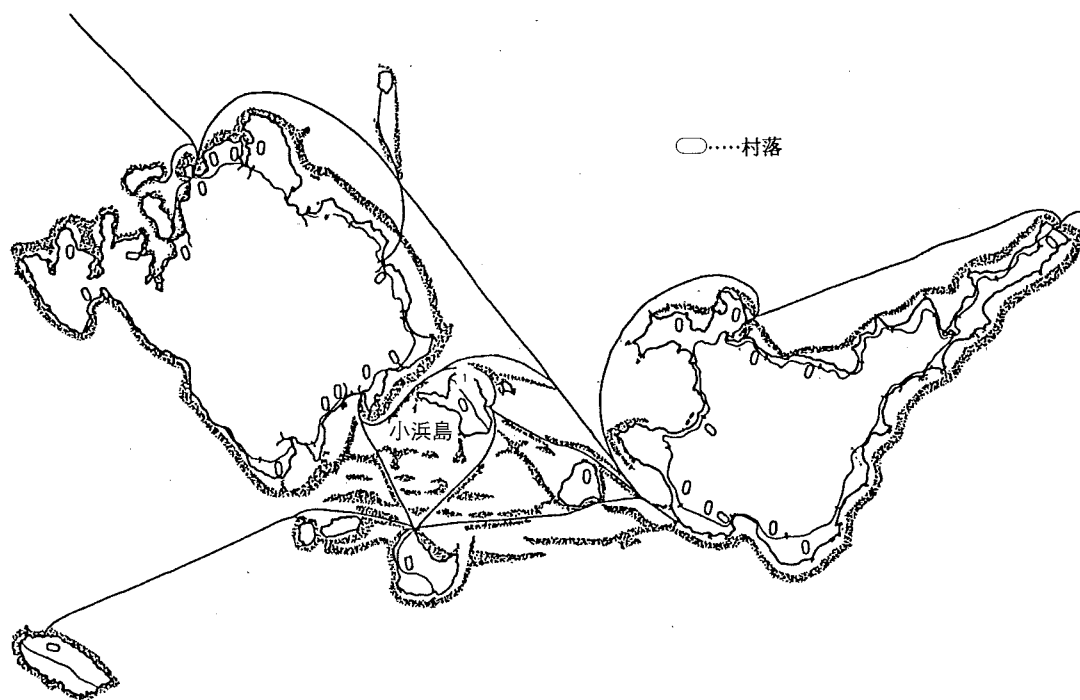


図2 元禄琉球絵図に描かれた海上交通路の模写図（『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ』より）

ゴ礁の空白地帯もみられ(図1の中のA)、この水域では水深の深い自然の開水域になっていて諸船が航行するには適した海域であった。そのため古くから八重山の島々を結ぶ海上交通路として発展した。事実『八重山島由来記』には、「嘉山津口亥子之方向、広式町〇拾四間、深三拾尋、船繫所迄広四拾六間、角深三尋半より七尋迄」と、船舶の記述がみられる。

以上のように周囲を取り巻く海域の環境は海上交通の要衝たる位置を占め、そこにウティスク山遺跡とユンドウレスク遺跡が選地しているということこそが両スクの機能や性格を考えるキーワードではないかと思うのである。

ウティスク山遺跡は島の北側海岸にある。遺跡近くの海岸では海食崖が未発達で、長さ約120~130mの砂浜(ハマ)を形成し南国特有のビーチになっている。近年、この海浜景観に目をつけた開発業者がリゾート開発を進め営業を行っていたが、バブル崩壊等も重なりうまく稼働してないようである。

海域と陸地部は砂浜を挟んで接続する。遺跡はその砂浜から約130m入ったところにあり、標高33mの独立した琉球石灰岩の岩山の上を平坦に造成して築かれている。遺跡周辺では石材である良質のトラバーチンを産出し、1935年~1943年まで業者による採掘が行われていた。切り出されたトラバーチンは、砂浜近くの海岸に集積されそこから小型船によって嘉弥真島との間の自然の開水域(船舶)まで運ばれ停泊していた大型船に積み込まれ那覇や日本本土へと移出されたという。国会議事堂にも小浜産のトラ

ウティスク山遺跡の立地と周辺の環境



図3 ウティスク山遺跡とユンドウレスク遺跡の位置図

バーチンが使用されていると島の人々は教えてくれた。

ウティスク山遺跡の南側約150mには聖域コーキワンがあり、さらに400m南には標高93.7mの西の大岳、さらにその東に標高99.4mの大岳が聳えている。このウティスク山遺跡は信仰の対象にはなっていないが、聖なる山として出入りがタブー視され、近くに農地を所有する島人でもほとんど出入りしたことがないとのことであった。そのため、ウティスク山に関する伝承や昔から語られている由来など全く聞くことができなかった。もちろん築城主体者についても不明である。

なお、次項でとり挙げるユンドウレスク遺跡はこの遺跡の西側500mほど離れた海岸沿いにある(図3)。また、そのほぼ中間には石積み遺構を有するバカレスクという遺跡の存在が知られているが今回の調査では確認できなかった。

ウティスク山遺跡の縄張り構造

ウティスク山遺跡は、前述したように、海岸砂浜から内陸部に僅かに入った小高い石灰岩の岩山を巧みに利用して構築されている。砂浜に出れば、近くには諸船が航行する水深の深い自然の開水域があり、海上交通の要衝という好位置にある(図1)。

小規模の岩山を利用したグスクは、通常最上部のみを平坦にしてその周辺に石積みを鉢巻状にめぐらすというのが一般的である。ところがこのウティスク山遺跡の場合には、最上部の平坦地を二つに区切り、そのエリア内への侵入を阻止するために石積みをめぐらしている。石積みは琉球石灰岩の野面積みになっている。断崖上の石積みは登りにくい箇所では低く、登りやすくなったところの石積みは幅が厚く、しかも高い。さらに平地に続く下位にも曲輪を配置し、最上部の主郭への侵入を阻んでいる。石積みを張りめぐらし外部から容易に侵入できないようにした空間、つまり防御された空間(平場)のことを曲輪と呼んでいる。

グスクとは広義の城のことであるが、前述したように八重山地方ではスク等と称されている。ところで城であるかないかは、防御された空間=曲輪があるかないかがその決め手となる。このウティスク山

遺跡の場合には、上下二つの曲輪によって嚴重なる軍事的防御機能をもった遺構が存在していることからみても明瞭な城郭遺跡だといえる。

さて、図4は縄張り調査をもとに私が描いたウティスク山遺跡の縄張図である。城郭用語でいう「縄張り」とは、城の設計のことであり、平面プランのことである。城造りの現場で図面に描いた設計図どおりに城地に縄を張りめぐらしたことに由来する城の専門用語である。城の研究には縄張り調査が重要となる。住宅の間取りからその家のライフスタイルが想像できるように、城の縄張りからはその城の性格や機能がよく理解できる。石積みはどのようなところにどのように積まれているか、その高さや幅はどうなっているか。そして城の出入口(虎口という)はどこに開き、どのような構造をとっているか等々、城の防御性に着目しつつ城の平面プランを把握する事を縄張り調査といい、その成果は縄張図によって表現される。

では図4の縄張図を見ながらウティスク山遺跡の城郭としての構造について考えることにしよう。

この城の主郭部は、図中のⅠとⅡから成り立っている。主郭部は城にとって一番大事なところで、築城主体者は主郭部を防御するため築城にあたっていろいろと工夫をこらした。城を攻める側は、まず縄張図の中の①、②、③の方向から城内への侵入を試みるだろう。縄張図でもわかるように、この①、②、③一帯は谷間でスク側の壁が崖になっている。谷底と主郭部との比高差は10mを測る。つまり、スクは石灰岩の岩山が露呈している尾根山頂を取り込んで選地されているため周囲が急崖をなし谷間からの侵攻を難しくしているのである。谷底から敵が登って来たとしても城内から石を落とすなどして敵の侵入を食い止めることができる。④、⑤、⑥からの侵入はどうだろうか。この方向には、主郭部を守るため幅2m以上(現状での石積みの高さは約1.5m程度だが、残存する石積みの幅が2~3mもあることから考えて、当時の高さは3.5~4mはあったものと推測される)の石積みが二重にめぐらされていてやはり主郭部へ攻め入るには攻城軍に多大なリスクが伴う。とくに④と⑥では急峻な斜面になっていて、もし敵がそこを這い上がって城壁に迫ったとしても曲輪Ⅲの石積みの上から丸見えとなり、迎撃の憂き

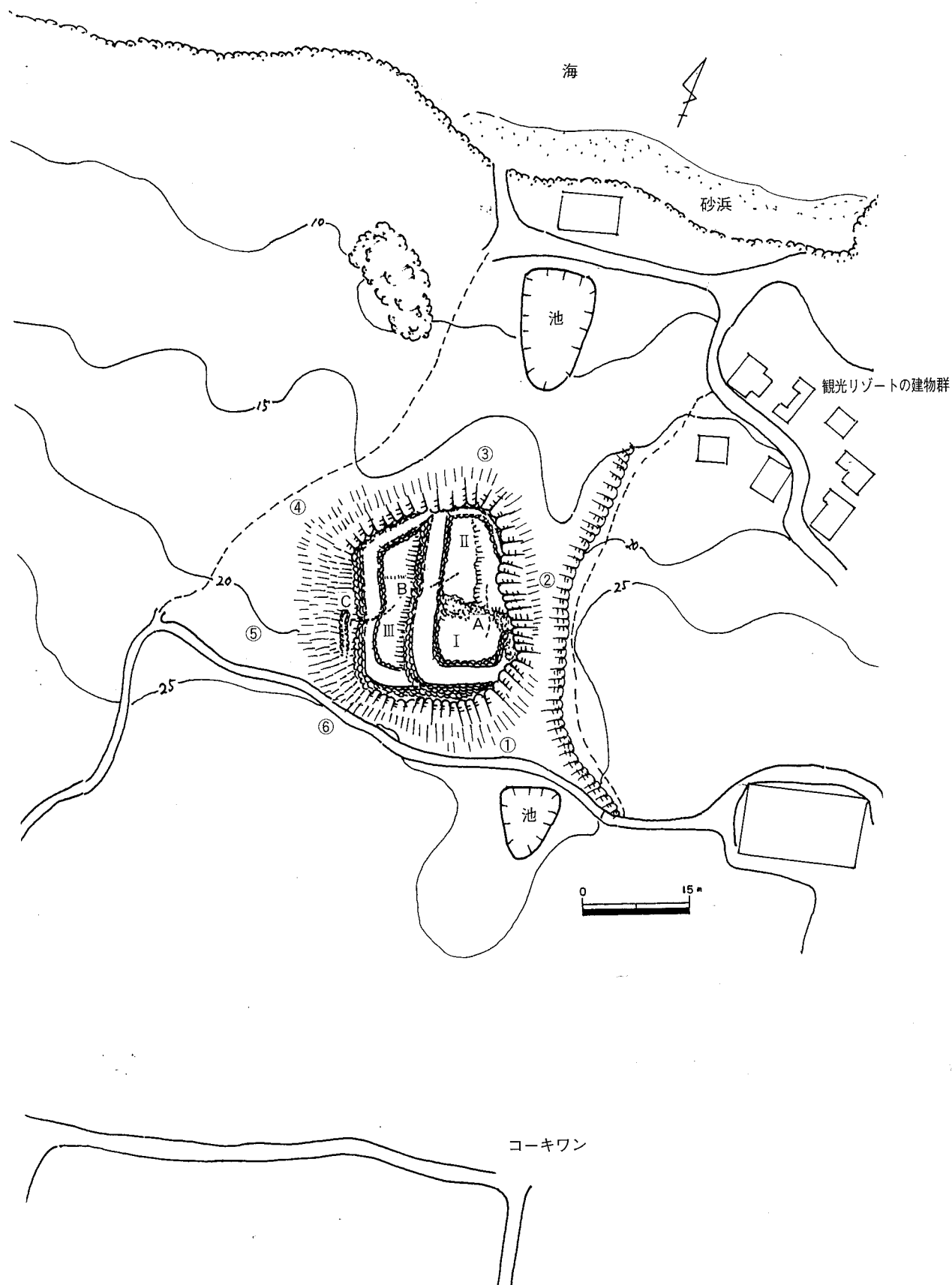


図4 ウティスク山遺跡縄張図(眞作図)

目にあうのは必至であろう。琉球石灰岩の岩山を利用して三方(図4の①・②・③)からの敵に対しては自然の断崖を城壁に見立てることでその侵攻を防ぎ、平地続きの方向(図4の④・⑤・⑥)には厚く高い頑丈な石積みをめぐらすことで防御ラインを固めるといった築城主体者の意図がうかがえ興味深い。したがって当スクは、規模こそ小さいものの敵の侵攻に対して防御性に富み、城郭としての機能を十分備えた城郭として理解できるのである。

ところが城の攻防を考えた場合にはどうなのだろうか。たしかに城の防御にあたっては非常に注意深く、しかも神経質ともいえるほど工夫がこらされている。しかし、出撃についてはゴツゴツした岩山の上に構築されていることや、曲輪構造などからみても効果的な構えが認められない。このような状況から推察すると、ウティスク山遺跡の性格は有事の際における立籠りを考えた海上貿易のためのスクであり、城主がいて領土支配をしながら日常的に生活するような城ではなかったのではないかと思う。

以下もう少し内部構造について観察を続けることにしよう。

主郭部を構成する曲輪ⅠとⅡは岩山の頂部を平らにし、急峻な断崖に面する東側にはほとんど石積みはない。石積みが認められるのは平地に続く西側とやや傾斜が緩い北側の一部と南側の一部に限られる。

曲輪Ⅰは東西20m×南北24mの広さを有し、所々に琉球石灰岩の岩盤が露出する。曲輪Ⅱとの境界以外はすべて石積みで囲まれる。石積みは現状の高さが1.5m程であるが幅は3mもある。曲輪Ⅱとは露頭した石灰岩によって区画される。この露頭石灰岩には90cmの幅で切れているところがあり、そこに曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間の出入口、つまり虎口Aがある。曲輪の内部では遺物包含層が確認される。また、この曲輪は、石灰岩が露出しているためかなり狭くなっているが、それでも100坪ほどの平坦地が確保されている。何らかの機能をもった建物が建っていた可能性が高い。本格的な発掘調査がまたれる。最も標高の高い位置にあって城郭中で一番防御性の高い場所である。つまり、主郭部の奥の一画にあって戦闘面で最も有利な位置を占める曲輪であるということである。

曲輪Ⅱは東西20m×南北13mの広さで曲輪Ⅰより

僅かに低く、両者の比高差は1m内外である。東と北は崖縁となり石積みは顕著でない。平地に続く西側に幅3mの石積みが認められるが崩落が著しい。その崩落がかなり進んでいる箇所には曲輪Ⅲとの虎口と思えるところの確認される。この場所は、ⅠとⅡを取り巻く石積みの中央にあたるところである。曲輪Ⅱからは北に展開する砂浜を眼下に、東シナ海を眺望することができる。曲輪の縁辺、とくに崖に面したところで遺物包含層が確認される。

曲輪Ⅲは、曲輪ⅠとⅡを取り巻くように積み上げられた石積み空間である。周辺部に積み上げられた石積みが崩壊して曲輪内部を覆っており、確認できる平坦面は幅5m×長さ37mの広さである。石積みの中央部付近に若干くびれた部分(図4のB)があり、そこに虎口が取り付けいていたものと考えられるが、石垣の崩壊が著しいことと、ブッシュが深く今回の調査で正確に確認するにはいたらなかった。この虎口らしいところの外側には一条の石積みが認められ(図4のC)、そこも同様の理由から今回の調査では確認できなかった。

ところでこのスクはどのような目的で築城されたのであろうか。その立地から考えるとある程度推測できる。このスクは、砂浜から少し内陸部に入ったところにあつてしかも東シナ海を遠くまで眺望できる岩山の上に構築されていること。また、海域の環境が前述したように海上交通の要衝にあたる位置にあること。そして、主郭部を中心に居住活動を証明する遺物包含層が確認されるということ等々を考慮にいれて考えると、海に関わって機能した海上貿易のためのスクだという姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。今後、本格的な発掘調査と詳細な縄張り調査の必要性が痛感される。

ウティスク山遺跡の築城主体者は不明である。これだけの構築物を残しながら何時、誰が築いたのか現在のところ全く明らかにされてない。ただ、前述したように主郭部で認められる遺物包含層の中から地元で焼かれた土器に混じって貿易陶磁器が採集されており、その陶磁器の年代観から14、15世紀頃の築城にかかるものではないかと考えられる。表面調査で採集された遺物についての詳細については別項を参照して頂きたい。

ユンドゥレスク遺跡の立地と周辺環境

ユンドゥレスク遺跡は、前述したウティスク山遺跡の500m西側に位置し、海岸沿いの海食崖を巧みに利用して築かれている。この一帯の海岸線は海に面する岩礁が波によって深くえぐられたノッチやゴツゴツ切り立つ断崖等が発達し、あたかも陸地と海上を遮断するかのように屏風状に連なっている。ところがそうした海食崖も場所によってはところどころ途切れ、小さな砂浜が発達を見せるところがある。こうした海岸は障壁となる岩礁がないことから海から陸へ、あるいは陸から海への出入が可能であり付近の住民が海との往復に頻繁に利用するところになっている。事実、沖縄県歴史の道調査の成果によれば地元で「インメー道」という旧道が集落からユンドゥレスクの前を通り海岸まで延びていることが報告されている（図5）。こうした条件を備えたところにちょうどユンドゥレスクは立地する。

標高13～15mの小高くなった琉球石灰岩の岩盤の

頂部と周辺の露出した岩と岩を巧みに利用して構築されたこのスクは、周辺が低地になっていることもあって、周辺低地との比高差が3～5mもあり小高い丘を形成している。そのため外から見るその姿も一見こんもりとした森に包まれ一種独特な雰囲気を醸し出している。

前述したウティスク山遺跡とは僅か500m程しか離れていない。島人の話では両スクの間にはバカレスクと呼ばれるスクが存在するといっている。バカレスクについては今回確認することができなかった。

さて、このユンドゥレスクの沖合1.8km先には裾礁と呼ばれるサンゴ礁が島の周辺を縁取っている。前にも述べたようにこの一帯の海域は石西礁湖とも呼ばれ他の礁湖に比べ水深の深い地域になっている。さらに右手に広がる海上（東北）には嘉弥真島との間を流れる水路があり、左手方向（西）には海流の激しいヨナラ水道が西表島と小浜島の間を流れている（図1）。こうした立地場所や周辺の環境を眺め

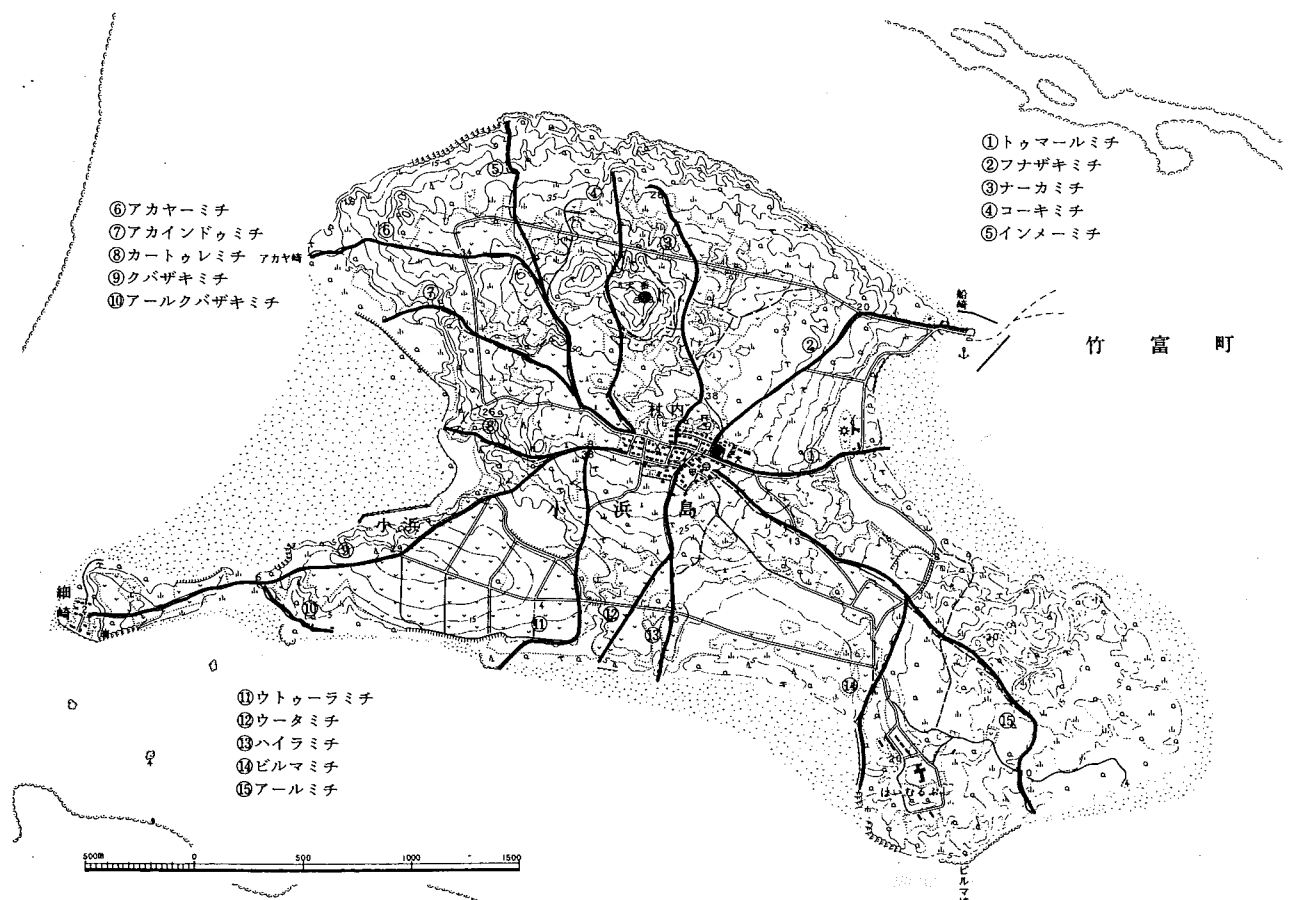


図5 小浜島の歴史の道（『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ』より）

ると、このユンドゥレスクとウテイスクは、前にも指摘したように陸上というより海との関連でつくられた蓋然性は強い。島にはユンドゥレスクの伝承が海上交通との関連で僅かに残されている。

山城浩編『小濱島誌』によれば、「昔、古見から兄妹がオールザ参りの旅出の途中、帆船の航海故に小浜島の北海岸に寄港し泊まることになった。その後は船の通路上この地点に立ち寄ることになって船宿りの場になってしまった。ある神びようる（神を祀る日）の日に此の場所に神の火が現れた。更には上国への旅出の節この場所に立ち寄って祈願すると航海は安全で無事目的が達成された。これらの事が王府へ上申されご下問になり感銘を呼んでこの地を聖地と祀るように許可された」。また、「兄妹は世間態を保つために、妹はユンドゥレスクに住みつき、兄はその隣り合うバカレスクに住むようになった。おってツカサの妹はウニ大主と連れ合うようになった」ということである^(註4)。

こうした由来があった後、ユンドゥレスクは島

人の信仰を深めることとなり聖域となったといわれる。さらにその後、ユンドゥレスク→ウテイスク山→コーキワン→西山（いりやま）という遷座の歴史を経て現在の西山が聖域として決まり定着していったということである。

ユンドゥレスクの縄張り構造

東シナ海を睨むかのように海岸線の海食崖の上に構築されたこのスクは、小規模ながらすぐれたプランを残す貴重な遺構である（図6ユンドゥレスク縄張図）。二重の石垣にぐるりと囲まれた中に、30m×15mの広さを有する曲輪Ⅱを置き、それに接続して10m×8m程の曲輪Ⅰを配置する。曲輪Ⅰは標高17mを測りスク内で最も高い位置にある。この曲輪Ⅰが主郭であろう。曲輪Ⅰの北側は波によって深く抉られたノッチの上に幅1.5mの琉球石灰岩の野面積みによる石積みをめぐらし、東は折りをもつ石積みが曲輪Ⅱ内を包み込むようにして曲輪Ⅱに向かっ



図6 ユンドゥレスク縄張図（写真作図）

て延び、曲輪Ⅲや曲輪Ⅳとを区切っている。曲輪Ⅲからの侵入者に厳しい横矢をかけるため工夫されて積まれた石積みである。また、西側では琉球石灰岩の岩盤の上に幅2m程の厚みの石積みを張りめぐらし、海からの侵入者(図6の①→)に対して横矢を効かす工夫がされている。その石積みの外側にも東西が断崖や石積みによって囲まれ袋小路になった小区画の曲輪ⅤとⅥが認められる。海からの侵入者をこの曲輪内に封じ込め、図5のbのマス状になった小さな石囲いの中から迎撃し、殲滅するためのものである。こうした発想は曲輪Ⅲや曲輪Ⅳでも見て取れる。

曲輪ⅢとⅣは、曲輪Ⅰの主郭を防御するための一種の腰曲輪である。その曲輪の廻りを取り囲む障壁は、基本的に琉球石灰岩の野面の石積みであるが、ここでは特に露出岩盤が発達をみせていることから岩盤そのものを巧みに利用して障壁に見立てたり、露出した岩盤の間を石積みで結んだり、直接岩盤を利用してその上に積み上げるたりするなどいろいろな方法がとられている。

曲輪Ⅰへの出入口(図6のA)、つまり虎口は一カ所で、南に向かい曲輪Ⅱに連絡している。虎口両脇の石積みは幅3m、高さ2mとしっかした琉球石灰岩の石積みになっており、侵入者に対し石積みの上から防戦できるようになっている。

曲輪Ⅱが一番広く東西30mほどある。二重の石積みによって囲まれ外からの侵入者に対し神経質なほどガードが堅い。虎口は一カ所で東南東の方向に向き相横矢を効かす工夫がされている(図5のB)。石積みの幅は2.5m、高さ2mほどで野面石積みとしては比較的厚く、しかもがっちり積まれている。曲輪Ⅱを取り巻く石積みの外側、つまり曲輪Ⅶは曲輪Ⅱから完全に切り離されており、曲輪Ⅱの外郭を構成する帯曲輪といえるものである。この曲輪は、内郭にあたる曲輪Ⅱや主郭の曲輪Ⅰを守るためにめぐらされた石積みでその重要さから屈曲が著しい。このあたりの城郭外周辺は、平地に続くため敵の侵入に対し最も弱点になり、その防御にあたって最大の注意が注がれたことを裏付ける石積み構造といえる。

曲輪Ⅱの虎口の前に粗末な小さな石積みが認められ(図5のC)、その外側にあたかも虎口を塞ぐよ

うに左側(東)から鍵状に伸びる石積みがある(図5のD)。この遺構は一種の甕城といえるものであり、その機能は虎口に殺到する敵に横矢を掛けたり、石を投げたりして侵入者の侵攻を防ぐため工夫されたものである。このような虎口構造をとるスクやグスクは、先島地方やあるいは沖縄本島でもあまり例をみない。ユンドゥレスクは、まさに小規模ながらも貴重な遺構を残すスクとして評価できるところである。

曲輪群の東側に隣接して船揚場に利用できる小さな浜(図6のE)がある。この一帯の海岸で陸と海の往来ができるところは唯一ここだけで、別の海岸線から海に出ようとしても海食崖の発達で不可能である。以上のことなどからこのユンドゥレスクこそは、海に面して立地し、海に関わって機能した城であり、「海城」と呼ぶに相応しい縄張り構造を有しているといえよう。

では、このユンドゥレスクの築城主体はだれであろうか。残念ながらこの貴重な遺構を有するスクの築城主体は不明である。これだけの縄張り構造をもつスクが何時頃、誰によって、何のために築城されたのか全くわからないというのはこの島の歴史を解明していく上で大変惜しいことだといわざるを得ない。現在の私たちにはユンドゥレスクの意義について数年に一度という割合で祭事が行われる聖地であり、島人から厚く信仰されている聖域だとしか認識されてないのである。ウティスク山の場合もそうだがユンドゥレスク等の御嶽と重なっている遺跡についてもっと学問的な光りをあてたいものである。

註1 『沖縄県の地名』平凡社 2002年 728頁

註2 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ』沖縄県教育委員会 1990年

註3 『沖縄大百科事典(中)』沖縄タイムス社 1983年 143頁

註4 山城浩『小濱島誌』小浜島郷友 1972年 57頁



写真1 ウティスク山遺跡（正面の小高い森）西から



写真2 ウティスク山遺跡の石積



写真3 ユンドゥレースク（ノッチ状になった海食崖の上のユンドゥレースク）



写真4 ユンドゥレースクの虎口（第6図ユンドゥレースク縄張図のBの虎口）



写真5 ウティスク山遺跡の西側の砂浜（前面の海上に浮かぶ島が嘉弥真島その手前が水路）



写真6 ユンドゥレースクに隣接する浜の漂着物（図6ユンドゥレースク縄張図のE）。この浜は海流のためか漂着物が多い。